

自由大学通信

1988年9月



「新しい精神生活のための自由大学」設立趣旨

人間は本来靈的な存在である。靈的存在はリアルである。

1960年代後半から、とくにアメリカの西海岸を中心に、世界的規模で起こり始めたカウンターカルチャー・ムーブメントは、「ニューエイジ・サイエンス」の起点のようにいわれている。しかしながら、たとえば、ヒッピー・ムーブメントとネオ・オリエンタリズム（東洋宗教への傾斜）とは、運動の現実局面においては、かなりの部分、架橋されまた重複されもして、そのスローガンに、「皆が靈媒になろう」ということがあった。しかも、先進資本主義国（日米欧）において全く同時に引き起こされた学生運動もまた、現実局面を見る限り、先のムーブメントと無縁ではなかった。

いま、60年代以降の風景をあらためて概観していえることは、ヒッピー・エコロジー・ムーブメントとニューレフト学生運動、それに、チベット仏教や禅、グルジェフ、シュタイナー、スーフィズムなどのエソテリックを含む宗教回帰現象（と名付けられてはいるが、その実、教団離れ＝組織宗教否定の靈媒の大衆化現象）の三つは、一つなるもの＝「近代の揺らぎ」の三つの表現のように見える。そして、この三つの揺らぎの先駆的底流として19世紀半ばに端を発するスピリチュアリズムの動きがあった。

前世紀半ば、アメリカ東海岸に始まるスピリチュアリズムの運動は、およそ一世紀を費やして全世界に波及し、様々なオカルティズムの再興を促しつつも、全体として、新しい「靈的人間像」の創出に寄与しつつあった。こうした流れを底流として、1960年後半、アメリカ西海岸より、ニューエイジ運動と呼ばれる新たな胎動が起こった。まず、カウンター・カルチャーが築かれ、オルターナティブ・ライフの模索があり、そこにベトナム戦争による「オリエンタリズムはリアルである」との感覚が加わり、「宗教回帰現象」があった。また、わが国においても「こころの時代」と名づけられた、その実「心霊の時代」がさまざまに風俗を賑わしていた。

二世紀におよぶ二つの運動は、現実面においては、たとえば英国の「マインド・ボディ・スピリット・フェスティバル」にみられるように、混交し、融合し、連続しているのである。

このところ、かなり熱心に「ポストモダン」のゆくえが模索されているが、アプライドな成果はほとんどあがっていない。「ポストモダン」を探る動きとしては、現在おおよそ二系統あるようにおもわれる。ヨーロッパ発の「ポスト構造主義」「フランス現代思想」と、アメリカ合衆国発の「ニューエイジ・サイエンス」である。

「ポスト構造主義」「フランス現代思想」は、哲学の視角からの近代および産業社会の検討であり、もちろんそれなりの成果はあげているが、この思潮のパラダイム自体、きわめ

て近代的であり、いわば「近代の最先端」そのものであり、けっしてポストモダンでもメタモダンでもパラモダンでもありえないことに、留意を怠ってはならないであろう。

一方、ニューサイエンスの方も、現代物理学と東洋的世界観との一致を高らかに宣言した「コペンハーゲン宣言」から、まだそれほど時間が経っていないが、明らかにその主張の基音に変化と後退が見られ、サイエンスと世界観は、さほど単純に握手しえないとの見方が一般化しつつある。

結局、今世紀末における「近代を超える」ための二つの動きは、尚、「近代の企て」の渦中のものである、ということではなからうか。

いま、われわれは、歴史をおよそ一世紀半のスパンでみる見方を提唱する。19世紀のスピリチュアリズムの勃興以来、経験と観察の世界で人間が本来霊的存在であるとの例証が数多くあげられ、反唯物主義的思潮や霊的人間観の底流をなしてきた。それはアカデミズムの世界に超心理学として結実しつつあるものの生みの親であった。ささやかな成果ながら、それが人間意識の本質の理解に及ぼす影響は甚大である。

こうした底流のもとに、今世紀のニューエイジ運動が起こった。スピリチュアリズムの運動は19世紀におけるニューエイジ運動であり、20世紀のそれと連続合流する人間思潮の大河である。今世紀のニューエイジ運動は、トランスパーソナルな人間観を提示し、それはまもなく「超心理学」との接続を果たすものとおもわれる。

われわれは、この大河が、権威や信仰によらず、認識と「気づき」による霊的人間観の確立に向かう抗しがたい流れであることに眼を背けるわけにはいかない。人類はターニングポイントに立ち、前世紀と今世紀の二度にわたり、自らの霊的認識のための大きなカーブを切ったのである。これにより、人間意識の変容はもはや決定的となったといってもよい。

およそいつから、人間は、「理性的であれば霊的ではない」という、錯覚をもつようになったのであろうか。理性的であれば事実をそのまま観察し、表現できることこそが合理的である。従って、科学が、霊的であれば合理的ではないと最初から宣言してしまうとしたら、それは不合理だ。霊的人間をそのまま容認しうるような学と科学の新しい地平が開けることが望ましい。

われわれはスピリチュアリズムの運動から「心霊研究」が、ニューエイジの思潮から「ニューエイジサイエンス」が胚胎し、共に厳密科学としての要件を満たさず、未成熟な状態にあることを承知している。しかしながらどれほどの時間と財が投入されたというのか。ことの重大さに比して費やされた労力は僅かではないのか。この領域においては未だ、直観と想像力によって明瞭に予見しうるものの方が、学的成果を上回っている。怠惰と無知、臆病と懷疑が病巣をなして人間の正常な努力を妨げている。呆れるほどの無力が、眼で見え、理性的に思考できるものの記述さえ妨げているのだ。

われわれは、いまや、ためらわず人間は靈的存在であるという。目的的存在であるとさえいう。われわれの立場は不合理であろうか。否、われわれはスピリチュアリズムの勃興以来およそ一世紀半におよぶ人間の経験と観察に基づいてそういうのである。人間が靈的存在であると宣言する賭は、現代においては、もはやパスカルの賭の危うさをもたず、百パーセント勝てる賭であるであろう。そうでないとの主張もできるが、現代においてはまだまだ通用するそうした知者ぶりの末路こそ哀れである。

さて、近代の弱みを言いたてることがわたしたちの目的ではない。前世紀以来の思潮を確実にし、そこに人間の価値と規範を求め、新しい靈的文化文明を守り立てるための装置を築くことが目的なのである。

わたしたちはそのための大学を希求する。靈的認識のための成人の学を希求する。施設によらず、権威によらず、自由に旺盛に学的探究を進める「眼に見えない大学」を創設し、澎湃として起こる人類の意識の変容に資し、靈的成長に役立つ一個の装置を築こうとするのである。

「新しい精神生活のための自由大学」は、新たなる靈的通貨の鑄造と流通に道を拓くであろう。変革は始まった。諸宗教はすべからく、人類各人の靈的成長を助けるためのサービス機関たるべきである。われわれはわれわれの大学の出発に際し、以下のように宣言し、諸兄の賛同と協力を求め、共通の未来に向け前進を促す。

●

「人間は本来靈的存在である」との認識を、人間知識の基本として掲げる。

この認識に立ち、人間にとっての靈的知識とは何かの回答を求める学的探究を靈学と呼ぶ。靈学は総合的、地球的に探索されなければならない。

○

靈学は絶対的なものではありえず、絶えず誤りうるものとして提示され、幾時代かの検討と確認作業の後、人間知識として純化結実する。

各人は自己の責任において靈学を選びとる。

靈学成立の条件として、靈的世界と人間とのあいだに、純度の高い媒体の存在が不可欠である。

自由大学は、日本各地に自由大学講座をもつほか、同種の志を持つ協会、団体、講座の主催者等と提携、連携する。

自由大学はネットワークであり、世界的なニューエイジの運動と呼応する。

以上

1988年9月1日

梅原伸太郎

松澤正博

発足にあたって

梅原伸太郎

このたび、「新しい精神生活のための自由大学」というものをつくることになりました。これは、一寸唐突な感じもありますが、私としましては、今までやってきたことと連続しているつもりです。

設立趣旨にもありますが、今度の自由大学は、19世紀以来のスピリチュアリズムの運動と現在アメリカを中心に進行中の、ニューエイジ運動をひとつの流れとして捉え、それが、新しい地球意識への転換を促すものだとのビジョンのもとにできあがったものです。新しい地球意識とは、私の考えでは、「人間が霊的存在である」とのはっきりした自覚のもとにすべての事柄を考えていく、そういう意識のことで、それが人類的、地球的規模でリアルになるということです。

私は、スピリチュアリズムおよび心霊研究という分野から研究を始め、わが国におけるニューエイジ運動の一つの高まりといってもよい「国際精神世界フォーラム」の設立に参画しました。また、鎌田東二さんらと「日本霊学研究センター」をつくりました。こうした流れのなかで、更に今度の「自由大学」の構想が浮かび上がってきたのです。

人類はこれから何千年、いや何万年以上も存在しつづけるのか分かりませんが、いまや経験的にいって、「霊界」といったものがあることははっきり分かっているわけですから、今後、宗教とか教団とかいう形ではなく、はっきりと霊的世界というものを自覚して生きていく、その上で社会なり文明、文化なりというものをつくっていく、そういう時代にさしかかっていると思うのです。スピリチュアリズム運動、オカルティズムの復興、シュタイナーの人智学、現在のニューエイジ運動等を一貫した眼で眺めて、結局のところ何が起こりつつあるのかというところを読みとらなくてはいけないと思うのです。そうした意識が沸々と煮えたぎるような学と教育の場を大衆次元で創りだして、新しい霊文明への転換の装置としなければならないと思うのです。そのためには世界中に自由大学のようなものができて、ある時横にさっと手を繋げばそれで世界は変わる。今ある大学などは何の意味もなくなってしまうでしょう。現在でも、技術教育的な部分を除けば、大学は人間の役にはたっていない、人類に間違った観念を押しつけるための機械になってしまっていると思うのです。中世の教会と変わりません。そうでなければ、大学人の自己満足と、教養というものの共同幻想の上になりたった暇つぶしの道具じゃあないでしょうか。少なくとも霊的世界観からすればそうなります。

先程、経験から分かったといった意味はこういうことです。人間というものは、ひとりで、或いは自分一代ですべてを経験するわけにはいかない。そこでスピリチュアリズムからニューエイジにいたる人間の経験を靈魂問題に関する最も充実した経験として捉え、代理体験とすべきなのです。もし、あれだけの経験というものを無視するなら、人間の経験などというものの意味がなくなります。またもし疑問のある人があれば、この歴史と事実を精査することによって反論する必要がある。それでなければ、反論どころか反対意見の表明資格もありません。

そこで、わたしたちは自由大学をつくる。この方法で人類の霊的基盤を探りあてる。奥

齒にももの挟まったような言い方をしないで、堂々と人間の霊的本性を示し、個々の宗教教説はひっくり返っても、これだけはひっくり返らないという、人類のための霊的知識体系を探りあてなきゃならないのです。それをもって、これから何千年、何万年かにわたる人類発展の舞台を造り上げるのです。

昔はこれを、世界宗教をつくるといった形でやったから失敗したのです。そうではなくて、自由大学をあちこちにつくって、霊的価値の自由市場をつくりだせばよいのです。そうすれば、人間が理性的であるかぎり、ある程度よいものが残り、霊的知識レベルも妥当なところに落ち着きます。何しろ、強制が一番いけないのですから、これしか方法はありません。考えてみれば分かることじゃありませんか。

百五十年ほどつづいたスピリチュアリズムのなかでは、既にある程度立派な霊的価値が鑄造されています。しかしそれも自由市場に出すしかありません。そうしなければ宗教的ドグマになってしまいます。それにまだ分からないところや、確定できない部分が沢山あることも事実ですから。

とにかくやる。霊界は今度こそ腰を据えてやる方針だとシルバーバーチが言っていますね。絶対に失敗しない、と。でも、地上のこちら側に受皿がなければ霊界といえども何もできないのですよ。変革するのはこちら側なんですからね。

わたしはどちらかといえば主にスピリチュアリズムの方から出発しました。しかし神智学や、人智学も考え合わせ、また日本のなかの霊学や更にはニューエイジの問題を考えていくうちに、これらを総合的に一つの流れとして考えるようになった。そこへ松澤さんがやってきた。松澤さんはこれまで阿含宗という宗教団体にいて相当やった人ですが、個人的にはニューエイジの紹介者として知られている。本質的に全く新しい時代の人である。なにせ阿含宗を今日までにしたた松澤マシーンなるものを握った人である。まあ、この人と共同歩調をとることになったのは運命的なことかもしれない。スピリチュアリズムがわたしの理論通りニューエイジと結びつくわけですから。梅で開いて、松でおさめるなどという予言もありますが、何かめでたいような気がしないでもありません。

わたしとしては、これまでの「国際精神世界フォーラム」や「日本霊学研究センター」などの活動をやめてしまうわけではありません。フォーラムの理想はまだ生きています。将来活性化させたいとも思っています。しかし松澤さんと自由に遊撃的に動けるところは動いて、大いに時代の空気を醸成してみたいと思っているのです。それには身軽な方がいいでしょう。センターの方はもう少し個人的な研究と活動のフィールドですね。ニューエイジのやり方はネットワークですから、どこが中心ということもなく、いずれ皆つながっていくのだと思います。

ところで、最初に手を染めたいのは、日本で霊能力者といわれている人たちの組織の問題です。これはすでに、核になるものを「日本霊能者・超能力者会議」ということでつくってあります。これを中心に能力者といわれている人々の問題を考えていきたい。人間が霊的存在であるといっても、そういう教育が普及されていない現在では、一般の人が霊的世界と接触をもったり、自分が霊的存在だとの自覚をもてるのは、こうした能力者を通じてなんです。ですから何としても早期にこの問題を何とかしなけりゃならないわけです。

一つには能力者たちを隠れた存在にしておかないで社会化するということです。およそ中世でもないのに、もうそろそろこれらの人を人間として認めなければ駄目です。人間のなかのある能力を分担する人たちとして正當に認めるのです。そうすればその分だけその

人たちの言動にも社会的責任が伴うようになります。闇の世界の孤独な権威や職業分類にも入らない賤業者としてではなく、社会的に認知します。いやそのように認知するように社会の方に働きかけます。そうした運動の一貫として霊能力者による定期講座をまずやりたいと思うのです。日本の霊能者にまだまだ問題があるのは充分承知の上です。でも、これもできるところからやっていくより仕方がないのです。純化の問題はその先の問題です。この問題ではわたしも随分間違いをやるかもしれない。しかしそれはある程度覚悟の上です。

わたしも、個人の霊的向上のためなら、家で瞑想でもしていればそれの方がずっと無難で優雅な生活なのですが、何の因果かこれだけはやらなくてはならないという宿題が溜まってしまいました。まあ、そのうちご放免になるまでやるまでのことです。

(談)

無印良神の時代

松澤正博

ブランド時代への衝撃的アイロニーでもってデビューした「無印良品」は、それ自体がブランドとなって下火となったけれど、ノンブランドの波は、いよいよこの秋、宗教界へと押し寄せそうです。

無印良品から無印良神へ——。ブランド名だけ立派で、そのじつカラッポだったり、インチキだったりの神さまはもうたくさん。もちろん差異化もたいせつだけれど、それはあくまでも内容に限ってのことであり、近代社会を、その最先端で牽引している機関車＝経済面におけるポーターレス・エコノミー現象が象徴するように、時代精神はあきらかに、外的、形式的な区分や区分け、適合性のないポーター（境界）の終焉を告げています。

産業社会を過程として内蔵しつつ近代の完成を目指す、これからの「ドラマティック近代」は、著しく脱構築化が進むと同時に、ジャンルやカテゴリーを超えて、「意味」の「流出」が激しくなるでしょう。しかしながらいっぽうで、静的な秩序、整然としたヒエラルキーへの欲求がたかまることも確かです。休むことを許さず、激しく躍動し続ける「ドラマティック近代」についてゆけない人々が、カオスの中心＝都会を棄て（都会に棄てられ）、エコロジストを気取って山や野に生活の場を移したり、自らの認識や存在のありかたを改めずにすむ集団を求めるからです。

かつて宗教は、自己否定による自己変革が基本にあり、信仰者は神・仏の導きに従って、自己を清め高めてきたわけですが、現代のおおくの教団は、ほとんどが前時代的な秩序感覚でもって運営されています。ですから、この社会についてゆけない人々にとって、わりあいに居心地がよい、という面がたしかにあります。自己否定、自己変革、認識の拡大と高度化、鋭敏な直観力の錬磨、霊的進化と深化への努力が必要とされない、現代におけるかずすくない集団のひとつが、宗教教団であるといえなくもない現状です。

「逃亡奴隷」のようにこの社会を棄てることも、虚偽の共同体に属して「安心」を得るこ

とも、もちろん時代精神とのミスマッチにほかならないわけですが、「ドラマティック近代」は、激しいと同時に優しく、また柔らかな社会でもあります。そうした人々をも包摂したうえで、さわやかに波のりしてゆくところに、真の怖さがあるようにおもいます。

今後のわが国の宗教シーンにとっては、組織宗教の形骸となって、文化的・時代的に死だように生きようが、瞬時も休まず躍動し続ける時代の血となって生きようが、等価です。どちらもが、同じくらいの力でもって、時代を押し進めてゆくからです。

そのことを確認したうえで、近代のわが国の宗教シーンを、もういちど振り返ってみましょう。

わが国が近代化されてゆくなかで、仏教系、神道系とりまぜて、いくつもの新宗教があらわれました。といってしまえば簡単なのですが、実際にそうであったのでしょうか。新宗教の基層にあって、民衆の共感を得ていたもの、新宗教を芯で支えていたものは、はたして本当に仏教の論理や倫理、神道の世界観そのものであったのでしょうか。

本尊を祀らず、宗教儀礼を行わなかった初期の高橋信次（宗教法人をとるあたりから変わっていきました）の霊統は、まず間違いなくスピリチュアリズムにあります。少し前にはやった守護霊、背後霊などは、明らかにスピリチュアリズムの言葉であり、真如苑というミーディアム＝霊媒とは、スピリチュアリズムそのものです。

新宗教のおおもとは大本だ、とはよくいわれることですが、明治31年、当時61才の出口ナオのところにあらわれた28才の青年、のちに出口王仁三郎と名乗る上田喜三郎は、そのときすでに「鎮魂帰神の法」や「霊学」を知っていました。稲荷講社の霊学者、長沢雄楯（かつし）から「霊学」を学んだ後、聖師王仁三郎は出口ナオと出会い、大本ができていくわけです。

また、三島由紀夫の『英霊の声』のなかで、二・二六事件や特攻隊で死んでいった人々の霊を降ろすところがありますが、このときの「神がかり」の手法は、友清歎真の『霊学筌蹄』に依ったとされています（『日本宗教事典』730P）。この友清歎真は、のちに神道天行居（あのかりど）を立教するのですが、本田親徳の霊統をひきつつ、王仁三郎と同様、長沢雄楯に師事しています。そして、しばらくのあいだ、大本で機関誌『神霊界』の編集をしていました（1918年9月から翌年の4月まで）。

そのほかにも、のちに「世界救世教」を立教した岡田茂吉や、『心靈研究』であまりにも有名な浅野和三郎も大本にいて、のちに「生長の家」を立教する谷口正治（のちに雅春）とともに、1923年に大本を出ています。

こうして概観しただけでも、いかに多くの逸材が大本から飛び発っていったかが分かりますが、少し目を凝らすと、他にもうひとつの事柄が見えてきます。それは、「霊学」の系譜です。

これまで「霊学」は、神社神道、国家神道とともに、復古神道の三つの道である、とされてきました。しかしながら、本田親徳はともかく、「古代の二十八宿の説の如きも古くから埃及（エジプト）支那、印度、波斯（ペルシャ）等に伝わって居るが、その本場は何うしてもカルデア學術の首府——メソポタミヤ地方である」（『霊学筌蹄』石城出版）などと平然と書き記している友清歎真や、それに連なるわが国近代の霊学者たちを、神道だけで括ることは、とてもできないことです。

西山茂氏や島蘭進氏は、新宗教の特色のひとつを「術」にもとめ、〈霊＝術〉系の宗教、

というタームを提出され、それを受けて大村英昭氏は『現代人の宗教』のなかで、次のように述べておられます。

今はやりの新・新宗教もそうだが、大正期ブームの新宗教でも、どうやら『霊界』なるものがキー・コンセプトであつたらしく、その実在なり、それへの働きかけなりを強調する教団が多い。『霊界』に蠢く不浄霊の障りを言い、憑依または供養のような『術』のおかげで、“悪因縁”を断って迷える霊にも己れの霊能にも、本来的な守護の力を回復させよう。表面的なモードの差異をとり除いて（一皮むけば）、このいかにも定型的な『霊＝術』が、慢性アノミー期にはやる宗教の共通因子のようである。

社会学的に見れば、確かにそのようにも捉えられるでしょうし、「霊学」をその最鞍部において越えるつもりならば、これで十分でしょう。しかしながら、「霊学」の低き谷、卑しき野（＝世俗化された教団）を行かず、「いのちにいたる険しき道」を行くならば、そこに、人類にもたらされた霊的遺産の雄大な景観がひろがり、高き峰のごとくに、先人の霊学者たちが立ち並ぶ姿を目にすることができることも、また確かなのです。

（つづく）

「新しい精神生活のための自由大学」は、これから毎月1回、開校の予定です。また、来春には、第1次「年次大会」を開くほか、各界、各国とのネットワークのためのさまざまなイベントを計画しています。

そうしたことのご案内は、『自由大学通信』（仮称——よい名前を募集中）でその都度、お知らせいたします。

「新しい精神生活のための自由大学」

連絡先

①品川区大井町1-10-1 梅原ビル

TEL(03)776-3523

②鶴岡房枝

TEL(03)602-2052